

<仙人、鬼、天狗>植物の名前にはとても可哀そうなのもあれば立派なのや怖そうなのもあります。ここでは超能力を持つ人や伝説の生き物にまつわる名の植物を3つ紹介します。日当たりの良い雑木林の斜面で見つけたのが“センニンソウ”の花です。実には白くて長い髭があるため仙人に見立てたものです。その近くにはヤマノイモに似たツル植物“オニドコロ”が小さくて地味な花を咲かせています。この“オニ”は「有毒で食べられない」といった意味なのでしょう。もうひとつは庭木として植わっている“カクレミノ”で、つぼみと葉の艶やかな緑が綺麗です。花はちょっと変わっていて雄花と両性花（オシベとメシベが共にある）が混じって咲きます。名の由来は姿を隠せる位に葉が茂るためようで、“テングノウチワ”とも言われます。



<センニンソウ>



<カクレミノ>

<実もまた佳し>ネムの花が終わってひと月ほどになります。



<ネムの若い実>

花の後は秋口に茶色く乾いて捻じれた豆のサヤが目立ちますがあまりぱっとしません。ところが真夏の今、青々とした葉の間に見える緑のサヤが涼を誘っていいものです。



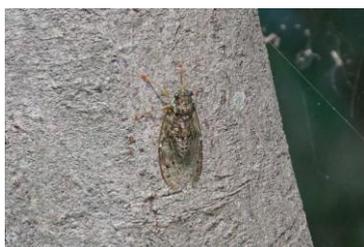
<オニドコロ>

<ど根性>キャンパス内の人の歩くところは殆ど舗装されていて植物は生えていないように見えます。しかしよく見ると路端、花壇や並木と舗装の隙間などには“ど根性”のスマレ、カタバミ、ツメクサやユウゲショウなどが四季折々に生えています。そんな中新たに目にしたのが“トキワハゼ”です。銀杏並木の根本にある網目金具の間で花を咲かせています。

<トキワハゼ>→



<セミ論争> 8月になって蝉が目立つようになりました。林の奥ではミンミンゼミ、メタセコイアの並木ではアブラゼミが見られます。ところで、「閑（しずか）さや 岩にしみいる 蝉の声」（芭蕉、奥の細道）は何ゼミでしょうね。大正末から昭和の初めに齊藤茂吉はアブラゼミ、小宮豊隆（独文学者）がニイニイゼミだとする“セミ論争”が起こり、結局は小宮に軍配が挙がりました。句の感じ方は人さまさまで、「これでいいのかな」と少し思ったりもします。「正解は芭蕉のみぞ知る」ですね。（文と写真：松本正勝）



←<左：ミンミンゼミ、右：アブラゼミ>